The Journal of Kamakura Women's University, Vol.26, pp.89-94, January 2019

資料

ヘルマン・レールスによるクルト・ハーンの評価
―野外教育の歴史的観点から―

西島 大祐（初等教育学科）

A Review of Kurt Hahn's Philosophy by Hermann Röhrs: Focusing on the History of Outdoor Education

Daisuke Nishijima
Department of Primary Education, Kamakura Women's University Junior College

Abstract

This paper reviews the philosophy of Kurt Hahn through Hermann Röhrs's writings. Hahn's basic concept was "experience therapy," which consists of four components: athletic training, expeditions, projects and rescue services. His works on social health continues to affect the educational systems of modern society.

Key words: Outdoor Education, Adventure Education, Experiential Learning, Outward Bound, Kurt Hahn
キーワード：野外教育、冒険教育、体験学習、アウトワード・バウンド、クルト・ハーン

１．意義と課題

本稿の目的は、野外教育の歴史的観点からクルト・ハーン（Hahn, K., 1886～1974）がどのように評価されてきたのかについて、冒険教育の興隆時期にあった1970年代前後に焦点を当て、確認することにある。確認にあたっては、ヘルマン・レールス（Röhrs, H., 1915～2012）の文献に注目していく。

まずハーンについてであるが、彼は1900年代における新教育運動の注目すべき教育者であるといえる。ドイツ生まれのユダヤ人であるハーンの特筆すべき業績には、ドイツのザーレム校[1)]やスコットランドのゴードンスタウン校[2)]といった寄宿学校の設立、それらの教育活動を基礎に設立した冒険教育学校アウトワード・バウンド[3)]、その後のユナイテッド・ワールドカレッジ、ラウンド・スクエア、国際バカロレアの設立や協力などが挙げられる。

ハーンは冒険教育のさきがけとして評され[4)]、国際的にも非常に著名な人物である。しかし意外にもわが国では知名度が低く、彼の実績を論じるような書物も少ない。彼自身の論文が少ないことや、ナチスとの確執といった彼の持つ複雑な経歴というものがわが国での紹介を妨げてきたそもそもの理由として窺い知れる。

ハーンを基礎とする冒険教育は、環境教育とともに1970年代以降の野外教育の重要な要素の一つとして捉えられてきた[5)]といえる。今日冒険教育

は様々な形で発展し、わが国の教育活動にも少なからず影響を与えてきた。アウトワード・バウンドから派生したプロジェクト・アドベンチャーのように、人工的に整備した専用施設を活用するケースや、簡易的なレクリエーション用具を用いて応用するプログラムも増えており、このような冒険教育の活動プログラムが個々のチャレンジやグループでの課題解決を促す体験学習の手法として社会教育や学校教育の場で活用されるようになっている。また近年では企業やスポーツチームの研修に用いられることも多くなった。

冒険教育とは一般に「自然の中で、さまざまな困難やストレスをともなう活動を与え、それらを克服することによって感動や成功感を経験するとともに、自己に対する意識を向上させ、人間形成を図ることを目的としている」（飯田、1997）[6]と考えられるものである。また、アウトワード・バウンドによって発展してきた野外教育の分野だと理解される。[7]

冒険教育についてはその教育的効果を実証するような研究が国内外で多く見られるものの、しかしながらハーンの人物そのものに着目するような研究は非常に少ない。ハーンの理念や実践に注目した国内の研究に目を向けて例を挙げると、ハーンの教育内容と設立当初のアウトワード・バウンドのトレーニングに注目した石川（2001）[8]や、ハーンの教育思想を新教育運動・青年運動といった視点から比較した西島（2013）[9]、田園教育塾の観点からヘルマン・リーツとハーンを比較したケレンツ（2016）[10]、グローバル人材育成について国際バカロレアとその基となったハーンに着目した本多（2017）[11]など、いくつかの論文や講演録を散見することはできる。しかしながらこれまでの野外教育研究の動向を考えると、特にわが国においては冒険教育の理念や歴史に目を向けるような研究が圧倒的に少ないといえる。

なぜハーンに注目すべきかという点であるが、そこには「生きる力」の教育的要素の一部と考えられる、現代社会において重要な「体験」や「コミュニケーション」の機会が失われつつあるという危機感がある。ハーンの教育思想の特徴について西島[12]は「理性重視でありながらも調和的な人間像を目指すことにあり、その人間形成を独自の精神教育の方法によって達成させるというものであった」と分析しており、さらに「ハーンの冒険的な教育活動が当時の青年運動とは違い、最後まで民族主義や国家主義に抵抗し、世界市民の育成を目指して実践されたものである」と主張している。健全な社会を担う若者の人間形成を目指すにあたり、ハーンの教育実践を今一度評価することに意義があると考える。

さて、これまでハーンの教育実践に注目してきた人物の一人に、ドイツの教育学者ヘルマン・レールスがいる。レールスは教育科学の専門家として知られており、改革教育学の実践者としてハーンに注目していた人物である。レールスの特徴はいくつかの自身の著書でハーンのことを紹介しており、1960年代から1980年代にかけて冒険教育が野外教育の中で発展・普及していく過程において、ハーンの教育活動を独自の視点から評価していたことにある。そこで本稿ではレールスのハーンに対する評価を冒険教育の発展期にある1960年代と普及期として考えられる1980年代の二つの時代区分に分け、それぞれの時期のレールスの視点に注目していくこととした。

2．1960年代のヘルマン・レールスによるハーンの教育への評価

レールスの代表著作の一つには、1966年に出版されたその名も “Kurt Hahn”[13] というタイトルの編著書があり、多くの著名人やハーンと関わりの深い人物からの寄稿が集められている。この著書は簡単にいえば、これまでのハーンの業績をできるだけ時代の流れに沿って一冊にまとめたものということができるだろう。レールスはこの編著書の中で、『クルト・ハーンの教育思想』[14] というタイトルの論文を自身で著しており、ハーンの特徴について述べている。次の一節は、レールスがハーンの教育理念について述べている部分である。

「体験療法」はハーンの教育概念の基本理念

の一つである。生きていくだけで複雑な要求をされる現代社会において、若者は大人になるまで学ぶ者としての立場を続けることになる。もし自己発見や自己実現を望むのであれば、テストを受けて自身を証明する必要がある。若者は社会的な病気の中にいる。なぜなら近代社会の枠組みにおいては、社会の権力に対する若者の自然な反抗や挑戦が、彼らの基本的な人間としての能力を伸ばすことに繋がっていないからである。このような状況の中で若者の共同体意識を育む組織が必要であるとして、ハーンは自身の提案したトレーニングの弾力的なシステムの中にその要素を体系づけた。そのトレーニング要素とは運動競技、遠征、研究課題、救助活動に費やす時間であり、これらは単体で行うことも組み合わせることもできる。ハーンの提案する枠組みには、教師生徒間の相互の強固な尊厳が不可欠であり、ペスタロッチがルソーのいう「ほぼ無制限な自由」という概念に反対するために求めた「賢明な自由の制限」が含まれている。精神的な面がペスタロッチと似ているクルト・ハーンは、若者の個性の復活というものについて「自発的な気持ちが湧き出る思いに支えられている」場合にのみもたらされることを特に強調して主張していた。[15]

このようにレールスは、1960年代の当時の社会状況において若者の健全な育成のためには、ハーンによってもたらされた運動競技、遠征、研究課題、救助活動といった「体験療法」と呼ばれるものが必要であるとしていた。運動競技、遠征、研究課題、救助活動として示された4つの要素[16]は、ハーン自身が当時から教育活動の柱として据えていたものである。このハーンの考えは「奉仕・努力・不屈」を基本理念とする現在のアウトワード・バウンドへ引き継がれている。[17]

ちなみにレールスはハーンを直接的に野外教育や冒険教育という視点で評価しているわけではない。レールスの述べるハーンの「体験療法」といった基本理念が、アウトワード・バウンドを通して後に冒険教育としての評価を高めていったと考えられる。

3．1980年代のヘルマン・レールスによるハーンの教育への評価

1980年代のレールスの著書において、彼はスポーツという立場からハーンの教育活動に注目している。彼は自著である『スポーツ教育学とスポーツ現実』[18]の中で、次のように述べている。

スポーツとスポーツ授業の陶冶価値というテーゼが正しい限り、スポーツ経験や体験は、行為力をフェアな精神に、自発性を協調心に結び付けている生活実行の形式に変わらなければならない。このような陶冶目標は、エディンバラ公賞システムでは、スポーツが奉仕、遠足、趣味、（そのつど、少年のための）身体活動、（そのつど、少女のための）暮らしの設計を包括している広範囲なプログラムの一部として、意識的に営まれている限り、そこに設定されているといえる。[19]

ここで述べられている「エディンバラ公賞システム」とは、ハーンのゴードンスタウン校での「モーレイ・バッジ」をもとにした賞システムであり、現在にも引き継がれているものである。また、レールスは生活形成力といった観点からアウトワード・バウンドの目標を引き合いに出し、次のように述べている。

その目標は、技能や知識を与えることよりも、むしろ、生活及び性格訓練である。…（中略）…参加者の生活経験を意識的に結び付けられる社会政策的な授業は、活動の共通基盤を固める役割を果たしている。この短期学校での約4週間の課程の参加者は、一般的にみてギムナジウム、職業学校の生徒、職業見習い生、学生である。このように混合的に構成されていることによって、プロジェクトでの作業を豊かにし、そして、とりわけその作業がスポーツ遊戯を媒介にして解決できる多様な社会問題に対し、好都合な雰囲気が醸し出されるのである。[20]

レールスは生活体験やスポーツを手段とした集団での作業に教育的な意義を見出していたといえる。さらにレールスはアウトワード・バウンド・スクールについて、「スポーツを中心にしたプログラムの枠内で、いろいろな生活体験が意識的にグループ編成で一層強く展開されることによって、学校と労働世界を生産的に補完できるだろう」[21]とも述べており、スポーツによる生活体験といった教育活動の必要性を訴えている。

レールスが当時スポーツに対する見解をどのように持っていたかについては、『遊戯とスポーツ』[22]という著書の中で確認できる。レールスにおいては「生存の保証、生の解釈、生活の克服、及び生の充実は、スポーツの、とりわけその人間学的機能を形成している本質的な構成要素なのである」[23]という見解を持ちながら、スポーツ活動における生存の保証という点に大きな役割があると捉えていた。

> 危機的状況の中で生き残るということ（サバイバル）が、ジョギング、トリム運動、柔術、サバイバルトレーニング等々の多くのスポーツ活動の基本的な動機である。サバイバルは、原始時代の狩猟、採集的生活状況を内容として取り入れたもので、人里離れた野生的な自然の中で何日間かにわたって試練に耐えるスポーツ活動として理解される。[24]

レールスはスポーツの価値に野外でのサバイバル活動があることを認めていたといえる。彼はこの著書の中で続けて次のようにも述べている。

> このようなサバイバル運動は、アメリカ合衆国において―歴史上の開拓時代の状況と現在のアウトワード・バウンド・スクールの実践に刺激されて―かなりの反響を見出した。ナイフ、火打ち石、及び一日分の糧食だけを装備して森林の中に投げ出され、磁石や地図を持たずに、歩いて何日間もかかるほど遠くにある人里に辿り着くことが要求される。しかしこれらの試みは、当然の社会的諸要求からの逃避であるとその批判者達から攻撃されるところの近代スポーツを代表するものでは決してないのである。[25]

上記のように、レールスの捉えるスポーツには野外でのサバイバルトレーニングのような「生」を直接的に感じる自然の中での生活体験があり、そのような生活体験の陶冶目標といった点で、ハーンの行う冒険的手法による教育活動に共感していたものと考えられる。レールスにおけるハーンの教育活動の意義とは、身体的な原体験を通して得られた学びを実際の社会生活に還元し、そのことによって社会が健全化することを目標としている点にあったということができる。

4．まとめ

本稿では、野外教育の歴史的観点から、当時のハーンがどのように評価されてきたのかについて、レールスの見解をもとに確認してきた。1960年代から1980年代の冒険教育が発展・普及していく時期において、レールスはハーンの運動競技・遠征・研究課題・救助活動といった4つの要素によるいわば「体験療法」といったものの必要性を認め、さらには「生」を直接的に感じる野外での体験が健全な社会の形成のために意義あるものと評価していたことを確認することができた。

レールスの評価するハーンの教育活動は、冒険教育として現代社会にも影響を与えているところが大きい。子どもたちの様々な体験が減少しているといわれる昨今、健全な社会形成に繋がる野外教育の意味を問うことが今後一層必要であると考える。

引用文献及び注

1）バーデン公マックスの協力によって1920年に設立された田園教育塾。ハーンは初代校長となる。ナチスによるハーンの収監とともに一時閉鎖されるが、1945年に再開される。現存する学校である。

2）1933年に収監されたハーンがイギリス首相マクドナルドの協力でイギリスへ亡命し、その後

1934年にスコットランドのモーレイ州に開校した学校。初代校長となる。1940～1945年の間、戦争の影響でゴードンスタウン校はウェールズへ疎開する。

3）1941年にウェールズのアバドヴェイで発祥した冒険教育学校のこと。ハーンのゴードンスタウン校の教育実践から生まれたモーレイ・バッジ（後にエジンバラ公賞となる）の計画がもとになり、アウトワード・バウンドへと発展した。設立当初は若いイギリス兵がドイツとの海戦に負けないために身体と精神を強化するという目的があったが、その後社会の変化とともに青少年の健全な精神育成の方法として注目され、世界中にアウトワード・バウンドの冒険プログラムが広がった。わが国では1989年に長野県小谷村で開校され、現在も全国的な活動を展開している。ちなみに "Outward Bound" とは船の出港準備を表す言葉がもとになっており、設立当初は Outward Bound Sea School という名称であった。

4）Priest, S. & Gass, M. A.（2005）. Effective Leadership in Adventure Programming. Human Kinetics. 28-29
この中でハーンのことを " "grandparent" of adventure programming" と表している。

5）星野敏男・金子和正監修（2011）：野外教育の理論と実践、杏林書院、17-18

6）飯田稔（1997）：生きる力を育む冒険教育、女子体育、8: 8-11

7）飯田稔（1988）：森林と冒険教育、森林文化研究、19：47
飯田はこの中で Mortlock, C.の著書である『冒険教育』を引用し、「冒険教育を発展させた土壌は野外教育であり、アウトワード・バウンドがその種となり、花を咲かせたと考えられる」と述べている。

8）石川道夫（2001）：クルト・ハーンとアウトワード・バウンド、教育新世界、50：59-64

9）西島大祐（2013）：アウトワード・バウンドの創始者クルト・ハーンの教育思想について―ザーレム校での教育実践と新教育運動・青年運動との関連、野外教育研究、16(2): 1-13

10）ラルフ・ケレンツ、米山かおる訳（2016）：田園教育塾　ヘルマン・リーツとクルト・ハーンにおける基本理念と国際的責任、玉川大学教育学部全人教育研究センター年報、2015(2): 11-18

11）本多舞（2017）：国際バカロレアの理念からみるグローバル人材育成の意義：クルト・ハーンに着目して、筑波大学教育行財政学研究室紀要、69-76

12）西島（2013）：前掲書、9

13）Röhrs, H.（1970）. Kurt Hahn. London. Routledge & Kegan Paul.
原典（1966）はドイツ語であるが、本稿では1970年に出版された英訳版からすべて引用している。

14）Röhrs, H.（1970）：前掲書、123-136
英文タイトルは "The Educational Thought of Kurt Hahn"

15）Röhrs, H.（1970）：前掲書、126
本文では著者訳を掲載している。意訳部分を含むため、以下に引用した英文を記しておく。

"'Experience therapy' is one of the basic tenets of Hahn's conception of education. In modern society, in view of the complicated requirements of life, young people are kept in the dependent position of learners well into the age of adulthood; yet they need to test and prove themselves if they are to discover and realize themselves. Youth is socially sick because in the framework of modern society it is not led by natural challenge to its powers to develop the basic human capacities. In this situation a collective is required, and it is provided in Hahn's scheme by an elastic system of training devices: the break for athletics, the expedition, the project and the rescue service; these can be used either singly or in combination. For this a strong mutual respect between teacher and pupil is necessary and an acceptance of sensible limits to freedom-such as Pestalozzi called for in opposition to Rousseau's supposedly unlimited

concept of freedom. Spiritually akin to him, Kurt Hahn asserts even more emphatically that a personal renewal in the young can take place only if 'voluntariness is supported by compulsion'."

16）Hahn, K.（1965）. Address at the Founding Day Ceremony of the Athenian School. Kurt Hahn org. 5-6 （http://www.kurthahn.org/writings/athens.pdf）を参照。

17）日本青年会議所カテゴリー推進室青少年開発委員会編著（1977）：OUTWARD BOUND SCHOOL "限界への挑戦" 豊かな人間性をめざして、日本青年会議所、17

18）ヘルマン・レールス、長谷川守男・杉本政繁監訳（1990）：スポーツ教育学とスポーツ現実、ベースボール・マガジン社
レールスによる原典は、1982年にドイツで出版されている。

19）ヘルマン・レールス（1990）：前掲書：154

20）ヘルマン・レールス（1990）：前掲書：155-156

21）ヘルマン・レールス（1990）：前掲書：157

22）ヘルマン・レールス、長谷川守男監訳（1987）：遊戯とスポーツ、玉川大学出版部
レールスによる原典は、1981年にドイツで出版されている。

23）ヘルマン・レールス（1987）：前掲書、240

24）同上

25）同上

付記

本論文の内容の一部は、平成29年度日本児童学会研究集会及び日本野外教育学会第21回大会で発表した。

要旨

本稿では野外教育の歴史的観点からクルト・ハーンがどのように評価されてきたのかについて、ヘルマン・レールスの見解をもとに確認することを目的とした。1960年代から1980年代の冒険教育が発展・普及していく時期において、レールスはハーンの運動競技・遠征・研究課題・救助活動といった4つの要素による「体験療法」の必要性を認め、「生」を直接的に感じる野外での体験が健全な社会の形成のために意義あるものと評価していたことを確認することができた。

（2018年9月12日受稿）